

ライオンからあげ再訪*

Revisiting *Lion Kara-age*

—認知言語学に関する四方山話—

: A Chat over Various Topics Relevant to Cognitive Linguistics

中川 右也**
NAKAGAWA Yuya

概要

“ライオンからあげ”は実際には存在しない。けれども、不思議なことに、存在もしない架空のものを想像できる人も中にはいるのではないだろうか。人間は言葉を使って想像したり、理解したりする。認知言語学では、言葉とは、身体運動や五感などの日常経験が反映されたものであると考える。本稿では、認知言語学の考え方に沿って、言葉の不思議さを、様々な話題を交えながら考察を試みたい。

1. はじめに

まずは、本題である“ライオンからあげ”について考えてみることにする。“ライオンからあげ”なるものは、もちろん現実には存在しない。しかし、私たちは、“ライオンからあげ”という言葉を知ると、何がしかのものを想像する。私たちが想像するものは、おそらく次の2つのパターンに分けられるであろう。

- ①ライオンの肉で作られたからあげ
- ②ライオンの形をしたからあげ

内面重視型の人なら①を、外見重視型の人なら②を想像するであろう。では、私たちは、言葉を聞いただけで、なぜ存在しないものを想像できるのでしょうか。その謎を解き明かす手掛かりは、語の配列にある。


名詞 + [名詞]

通例、名詞が2つ並ぶと、前の名詞が形容詞の働きをし、後ろの名詞の質や形状などを説明する役割を担う。例えば“石橋”なら石の材質で作られた橋を、“目玉おやじ”なら見かけが目玉の形をしたおやじをそれぞれ表す。動名詞を学習したばかりの学生が、紅葉狩りを英語では *viewing maple* とは言わず *maple viewing* と表現し、キノコ狩りを *gathering mushroom* とは言わず *mushroom gathering* と表現することに違和感を持つようであるが、理由は同じことである(中川(2010)参照)。“ライオンからあげ”のような、架空のものであっても人間が想像することができるのは、既存の語を手掛かりにし、未知語を推測する能力を有するからである。認知言語学では、Langacker (1987) が提唱して以来、これを用法基盤/使用依拠モデル(*usage-based model*)と呼んでいる。Tomasello (2003) が述べているように、人間は言語を獲得・習得する際に、様々な言語現象をパターン発見(*pattern-finding*)し、広い意味でのカテゴリー化を行い、意味を構築しているのである。深谷・田中(1994)によると、脳中枢神経系がある程度発達した生物の中で、人間だけに“意味の不確定性”を抱え込んだ本格的“意味づけ”が可能なのは、十分な記憶容量と、成熟後も複数ニューロン同士の発火パターン痕跡を自由・自在に連合・連鎖させる柔軟な回路形成能力を、人間が獲得した

* 原稿受理 平成25年1月10日

本稿は2011年5月28日に開催された米子高専文化セミナー(於:米子市公会堂)において「ライオンからあげってなあ〜に?」という題名で講演した原稿に加筆・修正を施したものである。当日は足元が悪い中、大勢の市民の方々に参加して頂き、貴重なご質問・ご意見を頂いた。ここに改めて感謝の意を表したい。なお、本稿の題名に“再”を付しているのは上記の理由による。

** 一般科目

ことに起因するとしている。

2. 名詞を使った意味の成り立ち

2語で1つの名詞を表す複合名詞にも、意味と形式という観点から非常に興味深い側面がある。人間は、新たに創造したり発見したりしたものを認知する場合に、カテゴリー化を行うが、そのカテゴリー化において、既存の名前を利用することがある。これは既存の名前を用いた一種のメタファーである。身近なところでは、IT用語で使われる“フォルダー”や“マウス”等が典型的な例として挙げられる。いくつかの複合名詞も、このようにして一種のメタファーによって成り立っている。竝木(2009)は、複合名詞を次のように大別している。

- ① 2番目の名詞が最初の名詞に「似ている」もの
例: catfish (なまず), eggplant (ナス)
- ② 2番目の名詞が最初の名詞のためのもの
例 birdcage (鳥かご), doghouse (犬小屋)
- ③ 2番目の名詞が最初の名詞を「生み出す」もの
例 honeybee (ミツバチ), silkworm (カイコ)
- ④ 2番目の名詞が最初の名詞の「一部」であるもの
例: fingertip (指先), tableleg (テーブルの足)

次に、2語の名詞が合わさって1語の名詞を形成する例を見られたい。

ゴジラ = ゴリラ + クジラ

ある語の部分と他の語の部分に合わせて別の語を作るコンタミネーション (contamination) は、人間の認知の営みを実に上手く利用して、創られた対象のイメージを掻き立てる働きをする。しかし、創られた対象のイメージを形成するのは、何も名前の由来だけではない。綴りも深く関わっているのである。

- ①Gojira ②Gojeela ③Gozeela ④Godzilla

あのゴジラの姿は視覚的にも十分、その迫力を伝えてくれるが、名前の綴りからも想像を膨らませる工夫がなされている。①は日本語の音韻に合わせたローマ字表記であり、②と③はアメリカ英語の音韻に合わせた表記である。映画では、④の表記が使われたのだが、その理由として、怖くて迫力のある怪獣のイメージをだすために、God (神) をスペルの中に入れたとされている。

3. 音の持つイメージ

言葉の持つイメージには、“音”も深く関係している場合が多い。先ほどの“ゴジラ”という名前も、その発音を聞くだけで十分に存在感と強さが伝わってくるのではないだろうか。音のイメージと意味形成に関しては Rhodes (1994)、その具体的学習方法については中西・中川 (2012) に詳細が論じられている。ここでは身近な造語を例に考えてみたい。アイスクリームで有名なブランドの“ハーゲンダッツ (Häagen-Dazs)”は、その音の響きや表記で、ヨーロッパのブランドと勘違いしやすいが、実はそうではなく、アメリカのものである。ドイツ語に付せられるウムラウト (語の上にある“)を綴りに使っているのも、ヨーロッパの雰囲気を醸し出すためのものであろう。

ハーゲンダッツという言葉は造語であり、それ本来の意味はありません。創始者ルーベン・マタスによって、名づけられました。高品質なミルクをイメージさせる北欧の都市“コペンハーゲン”とそれに響きのあう“ダッツ”という言葉 (意味はありません) を組み合わせました。

(http://www.haagen-dazs.co.jp/contact_qa/faq/products.html)

何となく高級なイメージが漂う“ハーゲンダッツ”という名前は造語であり、生まれはアメリカ合州国なのである。次の日本語も造語を含んでいるが、この文を聞いた人は、何らかの共通したイメージを抱くのではないだろうか。

昨日、珍しいギメドの肉をメッテして食べた。

“ギメド”は何となく硬そうな獣の肉を、“メッテ”は叩きつけて、肉を柔らかくした感じを与えたのではないだろうか。言葉の音も意味に関係していることがわかる。

聴覚と視覚との間にも、ある種の有縁性が存在する。次の2枚の絵の内、どちらが kiki (キキ) で、どちらが booba (ブーバ) であると認識するであろうか。



(Ramachandran 2003)

Ramachandran (2003) によると、95~98%の人が左を booba (ブーバ)、右を kiki (キキ) と答え、同様の質問をタミール語族の人々に行った場合も同じ結果を示したと報告している。右の絵は、外形が鋭い屈曲があり、脳の聴覚皮質に表象される音にも鋭い屈曲を持っているゆえに、共通の属性を認識するのである。

4. 意味の捉え方

1つの語(句)が2つ以上の意味を有すること、これを言葉の“多義性”という。例えば a woman doctor と聞いたとき、ネイティブスピーカーは、①(性別が)女性の医者(a female doctor)と②女性の(ための)医者(a doctor for woman)を思い浮かべる。このように、曖昧な意味を持つ言葉を人間はどのように捉え、理解しているのだろうか。その1つが文脈による意味の決定である。次の文では、a woman doctor は、②の意味だと理解される。

Mary wants to see a woman doctor because she thinks she might be pregnant.

(メアリーはひょっとしたら妊娠しているのかもしれないと思っているから、産婦人科の先生に診てもらいたがっている)

(吉川・友繁 2008)

次に示す日本語の文も多義的である。この文は、句読点の場所によって2通りに解釈されうる。

ここではきものを脱いで下さい。

看板が下駄箱の前に掲げられていたら“ここで、はきもの(履物)を脱いで下さい”と理解し、銭湯の脱衣所であれば“ここでは、きもの(着物)を脱いで下さい”と理解するであろう。人間がこのように理解できるのは、常識(慣習)に照らし合わせて判断していることは言うまでもない。有馬(2001)は、ノンセンスを引き合いに出し、次のように説明する。

私たちが日常生活のなかで、ふつう、このようなノンセンスをあまりおこさずにすんでいるのは、どうしてなのだろうか。…「このような場合は、このように解釈する」というふうにコンテキストに「常識的」な注意をはらっているからだろう。…この「常識的」ということを支えているのは、特定社会が共有する(common)ものの見方をそこに織り込んだ習慣的なこと

ばの使い方であり、それがルールとしてつよく習慣化した辞書や文法というコードをその暗黙の前提とするものの見方である。

(有馬 2001)

英語の場合も同様である。次に示すのは、文法的には2つの意味に解釈可能であるが、「常識的」に意味は1つに定まるだろう。

Time flies like an arrow.

主語を Time flies と捉えた場合、①時間ハエは一本の矢を好むとなり、無意味な文となる。普通、人間は常識と照らし合わせて、主語を Time と捉え、②時間は一本の矢のように飛ぶ(光陰矢の如し)と解釈する。このような「常識」的な判断は、我々の認知の営みにおいて多岐に渡る。“教師の勘”というものも、そうした判断の一つであろう。英文和訳や和文英訳を宿題に課した時、機械翻訳の力を借りる学生も中にはいるが、いくら機械技術が発達しても、教師の「常識的」判断によって、それは見分けられる。京都大学の英語の入試問題の解答を、ハンドルネーム「aicezuki」という人物が、2011年2月26日に「ヤフー知恵袋」に投稿したカンニング事件は記憶にまだ新しい。

楽しいはずの海外旅行にもトラブルはつきものだ。たとえば、悪天候や自然災害によって飛行機が欠航し、海外での滞在を延ばさなければならないことはさほど珍しいことではない。いかなる場合でも重要なのは、冷静に状況を判断し、当該地域についての知識や情報、さらに外国語運用能力を駆使しながら、目の前の問題を解決しようとする態度である。

(京都大学 2011 年入試問題)

Problems should be fun to travel abroad is inseparable. For example, a canceled flight, weather and natural disasters that have extended stay abroad is not so uncommon. In any case important to calm the situation, knowledge and information about the area, while making full use of foreign language proficiency in addition, is the attitude of trying to solve the problem before him.

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1256314487)

これは機械翻訳の限界を見せつけられた事件である。

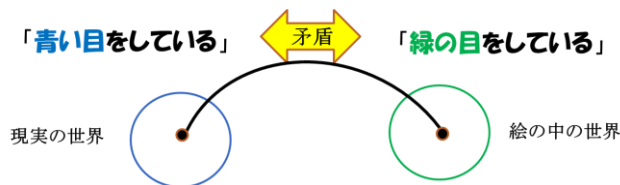
上記の英文を英語教師が見れば、「常識的」な判断で、それが人間によって英訳されたものではないとわかる。これは Google 翻訳に少し手を加えたものようだが、難易度の高い単語を使って表現しているにもかかわらず、主語と動詞の数の呼応という基本的な文法が間違っているなど、高度な翻訳技術が備わっていることが災いして足跡を残してしまっているのである。人間は、現時点でのテクノロジーを超えた自在な判別能力を持っている。次の「謎解き」もその一例である。「青い目をした女の子が緑の目をしている」と聞けば、一瞬、混乱しそうになるが、具体的な文脈が定まれば、その意味を捉えることができる。

In Len's painting, the girl with blue eyes has green eyes.

(レンの絵の中では、その青い目の女の子が緑の目をしている)

(Fauconnier 1994²)

一見すると矛盾を含んでいる文であっても、文脈さえ与えられれば、人間は、次のように頭の中で2つの異なる「女の子」をつくり、最後にその2つを結びつけて「同一人物」と理解する。頭の中で行われるこの一連の作業は、語用論的関数、つまり表象というイメージを通して我々が言葉を捉えていることがわかる。



(Fauconnier 1994² をごく簡略に図解)

上記のように、頭の中に作り出されるメンタル・スペース (心的構築物) の導入は、言葉が持つ曖昧性を解釈する手掛かりとなる。一例として日本語の「できた」を考えてみよう。「できた」には、2通りの解釈ができ、1つ目は「実際にできた」であることは容易に想像がつく。

勉強したので 90 点を取ることができた。

(実際に 90 点を取ることができた)

しかし、「できた」にはもう一つ、「実際にはできなかった」という解釈もありうる。このことは、仮想世界というメンタル・スペースを構築すれば、納得できる。

もっと勉強しておけば、90 点くらい取ることができた。
(実際には 90 点を取ることができなかった)

「できた」という表現に含意される2つの意味、「実際にできた」と「実際にはできなかった」を、人間はどのように判別しているのだろうか。その答えは、仮想のメンタル・スペースが構築される場合に「実際にはできなかった」と判別する仕組みになっているのである。

次の会話の「オチ」についてはどうであろうか。どこかで聞いたような会話の一節である。先程の例では、現実と仮想世界の2つのメンタル・スペースを構築した。次の会話では、現実、過去、仮想世界の3つのメンタル・スペースを構築すれば、父と母の捉え方のズレによって生じる会話の「オチ」を理解できよう。

Dad: When I was in my prime, I could've pinned

Hulk Hogan in a matter of seconds!

父: お父さんが全盛期の頃なら、ハルク・ホーガンなんかほんの数秒でファール勝ちできたよ

Son: Is that true, Mom?

子: お母さん、本当なの?

Mom: Probably.

母: おそらくね

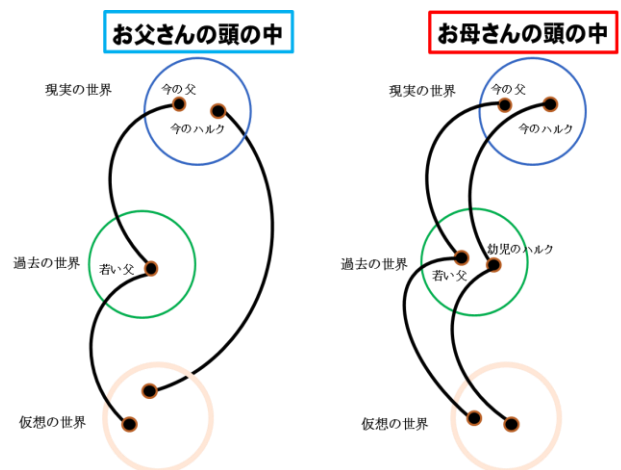
Mom: Of course, when your Dad was in his prime,

Hulk Hogan was in kindergarten.

母: もちろん、お父さんが全盛期だった頃は、ハルク・ホーガンは幼稚園だったからね

(Fauconnier 1997)

母親の息子に対する回答は、表面的には父親に同意しているものの、実際には疑問を呈していることがわかる。

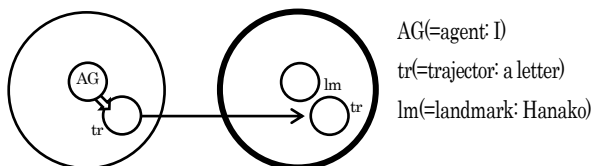


(Fauconnier 1997 をごく簡略に図解)

意味理解を手助けしているのは、文脈のみではない。構文も意味理解に一役買っている。次の例文の topamased はもちろん実際には存在しない造語である。

She topamased him something.
(Goldberg 1995)

Goldberg (1995) は、ネイティブスピーカー10 人に topamased の意味について、どのような意味と思うか尋ねたところ、6 人が give (あげる) と同じ意味であると答えたと報告している。動詞に後続する間接目的語と直接目的語の配列 (学校文法では第四文型に分類される文)、つまり一種の“構文 (二重目的語構文)” が造られた単語 topamased に意味を与えたのである。通例、この構文は、間接目的語が直接目的語を have するようになるという関係になり、それゆえに動詞の意味が自動的に give を含意するのである。二重目的語構文のイメージ・スキーマは次のようになる。



I sent Hanako a letter. (花子に手紙を送った)
(中川 2008)

二重目的語構文の持つ力の作用が、動詞から間接目的語 (人) へ、そして直接目的語 (物) へと伝えられ、“間接目的語 (人) have 直接目的語 (物)” という意味関係を構築するのである。このように、認知言語学では、形式と意味は密接に関係すると考える。学習者には、次のようなイラストを示すと、二重目的語構文の本質を理解する手助けになるであろう。



これらの事象は、give の反意語であるはずの get (もらう) が、この構文で用いられると、give の意味になる

ことから明らかである。



I will get Taro a watch.
(太郎に腕時計を買ってあげよう)

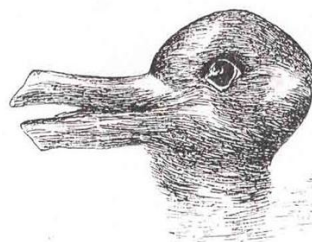
構文の知識は、語彙習得にも応用できる。deny は、第三文型では「否定する」、第四文型では「与えない」を意味し、学習者にとっては両者を全く別物と捉えてしまうために、難しく感じるようである。しかし、二重目的語構文のイメージ・スキーマを生かし、第四文型の deny は、間接目的語が直接目的語を受け取ることに対し「応じない」ということなのだと教えれば、語彙の定着にもつながるであろう。

He denied Hanako the opportunity to go to college.
(彼は花子に大学に行く機会を与えなかった)

これまで見てきたように、人間が意味を捉える方法は様々であるが、既存の知識等を手掛かりにしている点においては共通し、経験基盤主義に基づいているとも言える。複雑な意味処理を瞬時に行うことも可能である人間の認知の仕組みは、現代技術を持ってしても真似ができない側面もあるのではないだろうか。

5. 物事の捉え方による言葉の産出

認知言語学では、人間の経験主義的立場を重視し、五感などを使った身体運動や、文化・社会環境などを通しての相互作用によって得られた経験が、言語表現に反映されると考える。つまり、人間のものの捉え方は、文化・環境によって異なり、捉え方が異なれば言語表現も異なるということである。

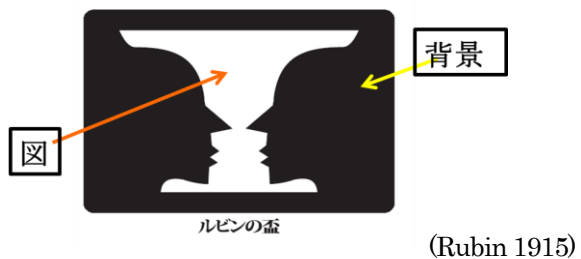


(Jastrow 1899)

上の絵は、同じ一枚の絵であるにもかかわらず、うさぎにもアヒルにも見える。この有名な“うさぎアヒル”の絵は、人間の認知する過程において、捉え方が異なれば表現方法も異なるという本質を教えてくれる。ウィトゲンシュタインは『哲学探究』で、この事象を次のように述べている。

風景相の変移という表現は、ある新しい知覚の表現であって、同時に変化していない知覚の表現を伴っている。
(ウィトゲンシュタイン 1953)

次の絵はどのように見えるであろうか。この絵も先ほどの絵と同様に、捉え方を変えることによって、それぞれ異なった絵に見えるであろう。



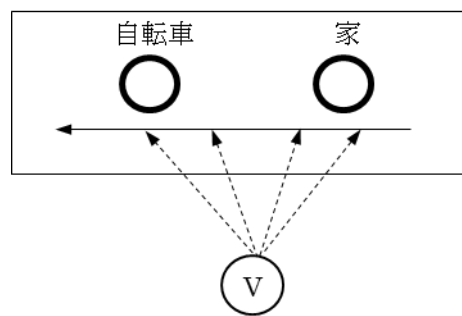
これは“ルビンの壺”と呼ばれる絵であるが、白い部分に意識を置くと「壺」に見え、黒い部分に意識を置くと「向かい合っている人」に見える。黒い部分が背景となって、白い図が前景化された場合、白い部分が「壺」に見えるが、「壺」と「横顔」を同時に捉えることはできない。この図を浮き立たせる“背景”と注意的、関心の中心となる“図”という物事の捉え方は、言語表現に反映されている。

- The bike (図) is near the house (背景) .
(自転車は家の近くにある)
 - ×The house (図) is near the bike (背景) .
(家は自転車の近くにある)
- (Talmy 1978)

どちらも同じ状況を述べているはずであるが、The house (家) を主語にすると、我々は違和感を持つ。

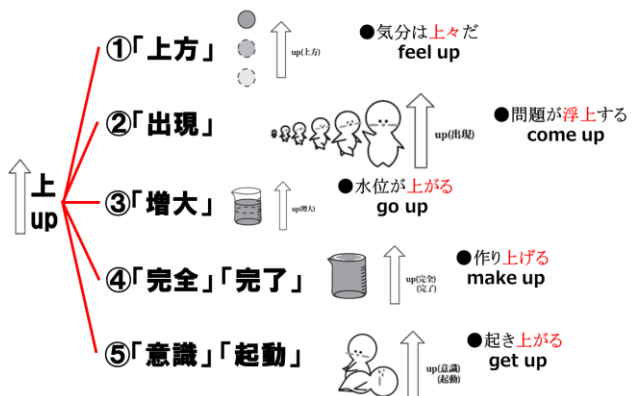


その理由を論理的に説明しようとするのが難しいが、“図”と“背景”の概念を用いれば、容易に説明を与えることができる。文の主語になる“図”は、“背景”を基準に述べられる。“背景”は“図”の位置を捉えるための基準となるものである。よって、基準となるもの(背景)は移動しないものと人間は認識しているがゆえに、その“背景”が、例えば the bike のように、移動しうるものである文を見聞きすると違和感を持つのである。上の絵の状況を人間はどのように捉えているのであろうか。その認知過程を示したイメージ・スキーマは次のようになる。



6. 身体感覚を反映させた言語表現

人間の経験は、身体感覚を基盤としており、それが言葉にも反映される。言い換えれば、言葉を理解するということは、身体感覚に基づいているのである。「上」という言葉が持つ意味をできるだけ多く想像してみよう。辞書で up を引くと、何通りもの訳が書いてあるにもかかわらず、私たちが想像しうる up の意味は、ほとんど単一なのではなかろうか。



(中川・土屋 2011)

それは、我々の思考が、無意識のうちに概念の基盤となっているメタファーによって支配されているからである。Lakoff and Jonsen (1980) は、肉体的経験や文化的

経験に根差した「上」「下」の世界観を、次に示す例を挙げて説明している。

- 「楽しさは上, 悲しみは下」
- 「意識は上, 無意識は下」
- 「健康・命は上, 病・死は下」
- 「支配は上, 服従は下」
- 「多きは上, 少なきは下」
- 「良いことは上, 悪いことは下」

(Lakoff and Jonson 1980)

言語能力は、独立したものではなく、身体能力など、様々な人間の認知能力の相互作用によって生み出される。これらの考え方は、近年、国内・外でも盛んに外国語学習に応用されつつある。学習者が困難とする文法や語彙習得において効果を発揮するからである。

What's up?

(どうしたの)

英語が苦手な学習者は、この英文を「上って何?」と訳すかもしれない。そのような誤訳を避けるためには、機械的に日本語と英語を暗記させ、慣習化させるのも一つの方法である。あるいは、論理的思考能力を有する年齢の学習者に対しては、明示的説明が有効であろう。もちろん、この up (上) は、文字通り空間的な「上」を表しているのではなく、up (上) という空間に対して人間が日常的に持つ感覚的イメージを反映させた用法であり、直訳するならば「浮上したもって何?」となり、「どうしたの?」という意味を有するのである。逐語訳では、メタファーに満ち溢れた言語表現を理解することに限界がある。on も「上」という逐語訳が与えられることが多い。

The cat is on the chair.

(その猫はイスの上にいる)

初学者であっても、on は up のように方向付けられた「上」ではなく、何かに接触した状態における「上」であることはわかる。



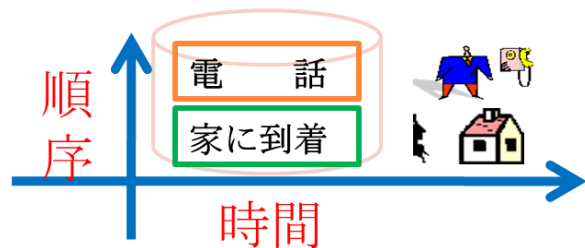
基本イメージ

けれども、on ~ing 「~するとすぐに」という表現となると、直感的に理解し、また、使える学習者は少ない。

On getting home, I phoned Taro.

(家に帰るとすぐに太郎に電話をした)

その主な理由は、逐語訳が思考を停止させ、メタファー表現の理解を阻害するからである。この表現も、メタファーの拡張事例であり、人間が「出来事」という抽象的な事柄を、「物」という具体的なものに置き換え、到着したという「出来事」のすぐ上に、隙間(空き時間)なく、電話をしたという「出来事」がのっけていると捉えていることを反映させたものである(中川 2009)。



英語を苦手とする学習者は、暗記の負担を嫌う傾向にあることは周知の通りである。次の無作為に並んだ数字を 10 秒間眺めて記憶できる者は多くないであろう。

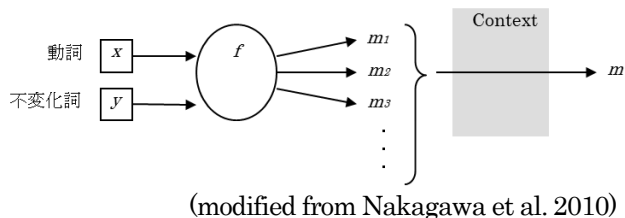
184294318418

もちろん、覚えられなかった理由は、記憶力だけの問題ではない。数字の羅列そのものに意味がないにもかかわらず、それを無理やり暗記しようとするのが覚えられなかった主たる原因であろう。人間は、納得・理解できないものについての記憶作業が苦手であり、有意味的なものを好んで記憶する。上の無作為に並べられた数字であっても、“イヤ(嫌) ヨニクシミ(憎しみ) イヤ(嫌) ヨイヤ(嫌)” という意味付けをすると記憶は促進される。いわゆる“語呂合わせ”を使った意味付けの例だが、意味付けはこれだけではない。認知言語学は意味の有縁性を探ることを得意とする。別名、認知意味論とも呼ばれる所以だが、語彙習得に意味の有縁性を応用する事例を紹介しよう。

句動詞は、基本的な単語を使った動詞と不変化詞(前置詞/副詞)の集まりに過ぎないにもかかわらず、学習者は苦手とすることが多い。

break (壊す) + up (上) = 解散する?!

日常生活でネイティブスピーカーは頻繁に句動詞を使用する。しかし句動詞を外国語として習得する際には、次のような言語処理が必要になる。



(modified from Nakagawa et al. 2010)

文脈を与えれば、出力されたものからそれに即した句動詞の意味を限定する能力を持つようにさせることである。つまり、あらかじめ言語処理関数 f に記憶された様々な句動詞の意味を、文脈という一種のフィルターにかけて一意にする能力を養うのである。記憶の負担を軽減するためには、動詞 x と不変化詞 y から構成される句動詞の意味を、イラスト等を提示して、視覚という人間の感覚器官を用いて直感的に理解する方法もある。

break(壊す) → (バラバラにする) + up(上) → (終了)



解散する

(中川・土屋 2011)

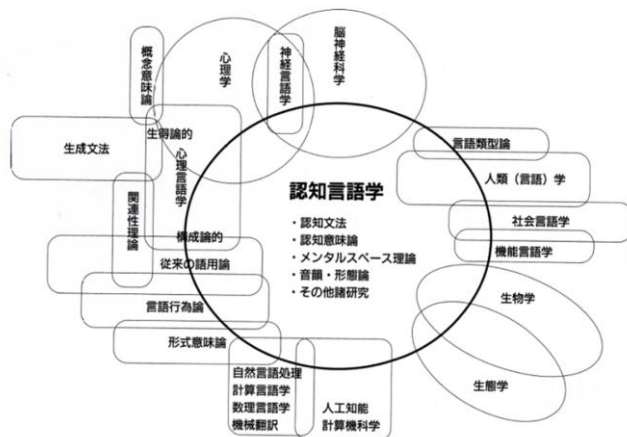
句動詞の習得を困難にさせている要因は、動詞と不変化詞の部分の総和から、句動詞全体の意味が予想できないというゲシュタルト性によるものが大きい。これを解消するには、抽象的なメタファーによる意味の拡張事例を具体的な形としてイラストで提示し、意味の有縁性に基づいた説明を学習者に行うことが有効であろう。

7. おわりに

本稿は、副題の通り、様々な話題を認知言語学に関連させ、まさに“四方山話”となった。このようになったのも、認知言語学を持つ性質によるものであろう。言語学の中では、パラダイムシフトがなされてから随分時は経つのだが、認知言語学は、とりわけ理工系との垣根を超え、関連分野の知見を取り組み、学際的な研究を進めている。本稿で引用した Fauconnier は、ポリテクニク(理工科学校)を卒業し、Lakoff は、言語学関連以外に、Where Mathematics Come From という著書を出版していることから、このことが伺い知れる。認知言語学では、本稿でも述べたように、今後は外国語教育にも

貢献する可能性を秘めており、ますます盛んになるであろう。認知言語学を研究する者として、その重要な役割を担う意義は大きい。

最後に、一つ、断りをしておかなければならない。本稿の主題である“ライオンからあげ”は、実際には存在しないということを前提とし、これまで話を続けてきた。確かに、2011年5月に講演を行った時点では存在はしていなかったのだが、2012年7月にTYPE-MOON社が開催したTYPE-MOON Fesにおいて、オリジナルコラボフードとして“セイバーのライオンから揚げ”が販売されていたようである。勿論、本稿と全く関係はない。セイバーというキャラクターがライオンの格好をしているパッケージに、から揚げが入った商品のようなのである。言語学的に言えば“セイバーライオンのから揚げ”であろう。私の“ライオンからあげ”とTYPE-MOON社の“ライオンから揚げ”とは、表記が一字違いであるとは言え、商標登録をしなかったことだけが今となれば心残りである。



(辻 1998)

参考文献

- 有馬道子 (2001) 『パースの思想—記号論と認知言語学—』岩波書店、東京。
- Fauconnier, G. (1994²) *Mental Space*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fauconnier, G. (1997) *Mapping in Thought and Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1994) 「合意学の構図」『カオス時代の合意学』, 創文社、東京。
- Goldberg, A. (1995) *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Jastrow, J. (1899) “The mind’s eye,” *Popular Science*

- Monthly* 54, 299-312.
- Lakoff, G. And M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar; vol. 1, Theoretical prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- 中川右也 (2008) 「二重目的語構文と与格構文をめぐって—構文指導における理論と実践」『CHART NETWORK』No.56, 19-22, 数研出版, 東京.
- 中川右也 (2009) 『「なぜ」がわかる英文法』ベレ出版, 東京.
- 中川右也 (2010) 『教室英文法の謎を探る』開拓社, 東京.
- Nakagawa, Y., K. Miyaguchi and K. Momoi (2010) “A Cognitive Approach to Teaching Phrasal Verbs,” Paper read at the 36th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Material Expo 2010, Aichi, Japan.
- 中川右也・土屋知洋 (2011) 『「なぜ」がわかる動詞+前置詞』ベレ出版, 東京.
- 中西のりこ・中川右也 (2012) 『ジャズで学ぶ英語の発音』コスモピア, 東京.
- 竝木崇康 (2009) 『単語の構造の秘密—日英語の造語法を探る—』開拓社, 東京.
- Ramachandran, V.S. (2003) *The emerging mind: The BBC Reith lectures 2003*, Profile Books Ltd, London.
- Rhodes, R.A. (1994) “Aural images,” *Sound symbolism*, eds. by L. Hinton, J. Hinton, J. Nichols, & J.J. Ohala, 276-292, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rubin, E. (1915) *Synsoplevede Figurer*, Gyldenhal, Copenhagen.
- Talmy, L. (1978) “Figure and Ground in Complex Sentences,” *Universals of Human Language: Syntax*. Vol.4, ed. by Joseph H. Greenberg, 625-49, Stanford University Press, Stanford.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*, Harvard University Press, Cambridge, Mass.
- 辻幸夫 (1998) 「認知言語学の見取り図」『言語』27.11, 30-37.
- Wittgenstein. L. (1953=1984) “Philosophische Untersuchungen,” G.E.M. Anscombe u. R. Rhees(Hrsg.), Wittgenstein Werkausgabe, Bd.1, Frankfurt am

Main: Suhrkamp. (藤本隆志訳) (1987) 「哲学探究」『ウィトゲンシュタイン全集 8』大修館書店, 東京.
吉川洋・友繁義典 (2008) 『英語の意味とニュアンス』大修館書店, 東京.

謝辞

本研究は、平成 23 年度～24 年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号：23720307）に基づく調査の一部である。